

# Black Dogs EXTRA 2

パニッシュメント・デイ



黒ねこ作

Illust カロ

# Black Dogs EXTRA 2

－ パニッシュメント・デイ －

黒ねこ作  
イラスト／カロ

## 【目次】

プロローグ	12
第一章 暗殺者の記憶	24
第二章 闇の胎動	94
第三章 九十九祥吾	132
第四章 パニッシュメント・デイ	196
エピローグ	252
あとがき	274

## 【登場人物一覧】

### 【八倉 直人】(ヤグラ ナオト)

モグリの義術医を営む青年で、本シリーズの主人公。

第四次世界大戦中は日本国防軍の第 307 特務機関へ所属し、  
暗殺者、というコードネームで呼ばれた元特殊工作員。

コルト M1991A1 自動拳銃を愛用している。

### 【雪島 沙希】(ユキシマ サキ)

第 307 特務機関・第一作戦班の情報分析官だった少女。

14 歳でマサチューセッツ工科大学を卒業した電子・情報工学  
の天才で、直人を専属でサポートする後方支援要員。

「ワイズマン」という小型ドローンを助手にしている。

### 【城坂 純太】(キサカ ジュンタ)

第 307 特務機関・第一作戦班の特殊工作員の青年。

直人の親友で国防軍訓練学校で成績を競い合ったライバル。

ラオスの山岳民族をゲリラコマンドにする軍事工作を担当し  
ており、「<sup>オブザーバー</sup>観察者」というコードネームがある。

### 【東明寺 紅音】(トウミョウジ アカネ)

第 307 特務機関・第一作戦班で情報分析官を担う美少女。

情報処理のプロでサイバー戦にも優れた分析官。

城坂純太と雨宮遥の後方支援を務めている。

直人に想いを寄せており、雪島沙希とは親友で恋のライバル。

## 【登場人物一覧】

### 【榊 三月】(サカキ ミヅキ)

第307特務機関・技術班の技術担当官の少女。

直人の親友でメカ全般へ深い愛情を持つプロの整備担当。

「三月工廠」というあだ名を持ち、機械弄りが趣味。

第一作戦班専属であり、爆発物の分析にも精通している。

### 【雨宮 遥】(アマミヤ ハルカ)

第307特務機関・第一作戦班の特殊工作員の少女。

敵地潜入によるヒューミントが専門分野で、<sup>ツーフフェイス</sup>「双貌者」というコードネームを持つ。優れた演技力と狙撃技術を備えている。

男勝りな性格と言動だが、恋愛に関しては誰よりも乙女。

### 【伊董 砂之】(イトウ サユキ)

第307特務機関の機関長で特務機関全体のナンバー2。

<sup>ミンストレイル</sup>「吟遊詩人」と呼ばれる特殊工作員で、聖職者じみた雰囲気と格言を引用する癖がある。直人の上官で、日本国防軍の少佐。

### 【神近 梓】(カミチカ アズサ)

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の社長で女傭兵。

「少佐」が呼び名の最強かつ最凶の傭兵。私生活はダメ人間。

第四次大戦中は、国防陸軍で第113特殊戦闘部隊を率いた。

第307特務機関へ一時的に所属した経験を持ち、直人に実戦を通じて高度な戦闘技術を叩き込んだ張本人。

## 【登場人物一覧】

### 【九十九 祥吾】(ツクモ ショウゴ)

NGO 団体『アスクレピオス国際医師団』に所属する義術医。  
精神医学、心理学、心理療法を専門とする医療研究者だったが、  
第三次世界大戦での軍医経験を通じて義術医師免許を取得した。  
半年ほど前に忽然と姿を消して行方不明となる。

### 【熊里 孝也】(クマザト コウヤ)

中央諜報部・情報課第 3 部 2 課所属の工作担当官。  
タイ出身の華人「トニー・シェン」という偽名を使い、第三次  
大戦以前からラオス国内で情報を収集しているベテラン諜報員。  
ナディ地区で置屋（売春宿）を隠れ蓑に経営している。

### 【林 秀成】(リン シュウセイ)

中華人民共和国国家安全部第 8 局の工作員。  
ラオスで九十九祥吾を追っている中国諜報機関の人間。

### 【レイヴン】

傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』のフィリピン系少女傭兵。  
特殊部隊出身、近接格闘戦が得意な義術強化猟兵。  
本シリーズのヒロインであり、直人の恋人。

### 【サーニャ】

レイヴンに懐いて行動を共にするロシア人の少女傭兵。  
肉体は十四歳だが、ある事情から精神年齢は六歳止まり。  
純真な性格で教えられた事は素直に吸収する良い子。

## 【用語解説】

### 【義術医療】(ぎじゅついりょう)

西暦 2026 年に登場したサイボーグ的な代替医療。  
全身義術化なら脳と脳幹を除く体の九割を人工化できる。  
外科医の八倉甚が開発し、一般的に「義術」と呼ばれる。  
数多の難病患者や傷痕軍人の治療へ貢献した医療技術。  
なお、義術化した人間を診る専門医を『義術医』という。

### 【特殊工作員】(とくしゅこうさくいん)

日本国防軍の特務機関へ所属する非正規戦専門の工作員。  
諜報活動、要人暗殺、破壊工作、敵地潜入が主な任務。  
諜報員と特殊部隊隊員の能力を兼ね備えた実動要員。  
日本国防軍の独自兵種で、海外では準軍事担当官という。

### 【義術強化兵】(ぎじゅつきょうかへい)

第四次大戦から登場した全身を義術化した兵士のこと。  
特殊部隊は兵士の体に高性能パーツを使うことが多い。  
義術強化兵に加え、義術強化猟兵、義術機甲兵、義術特殊兵の  
四種類が存在する。軍用の特殊部品『義術兵装』を使用するため、  
一般の人工パーツと違う機能を備えている。

### 【自律兵器】(じりつへいき)

第三次世界大戦から登場した人工知能搭載型兵器のこと。  
人間の脳をモデルに開発された人工知能を積んでいる。  
戦車、航空機、人型ロボットにも応用された。  
第四次大戦では義術の登場のより大半が支援機となった。

## 【用語解説】

### 【第四次世界大戦】(だいよじせかいたいせん)

西暦 2041 年 5 月に事実上の終戦を迎えた世界大戦。

第三次世界大戦終結から 5 年後の大戦であり、現代の荒廃世界を作った原因。『101 事変』を発端として約 6 年も続いた。

日本はアメリカを中心とする N A T O 諸国の支援を受け、ロシア、中国、南北朝鮮統一国と東アジアで戦っていた。

### 【廃都・東京】(はいと・とうきょう)

西暦 2035 年 10 月 1 日に放棄された日本の旧首都。

『101 事変』の象徴とも呼べる瓦礫と廃墟の都。

戦中から戦後にかけて闇社会が支配する街となった。

あらゆる悪徳が服を着て歩く街。現代のソドムとゴモラ。

### 【第 307 特務機関】(だいさんまるななとくむきかん)

日本国防軍・統合参謀本部直轄の軍事工作機関。

直人が所属した組織で、東南アジアを中心に展開していた。

### 【中央諜報部】(ちゅうおうちょうほうぶ)

日本の国内外で諜報活動を行う諜報機関。

アメリカの中央情報局 (C I A) を手本に組織された。

### 【第 113 特殊戦闘部隊】(だいいちいちさんとくしゅせんとうぶたい)

神近梓が創設した危険な戦闘任務専門の特殊部隊。

ワケありの外国人兵士が多く、味方に「外人部隊」と揶揄されていたが、国防陸軍で多大な戦果を上げる部隊でもあった。



「怪物と闘う者は、その過程で自らが怪物と化さぬよう心せよ。おまえが長く深淵を覗くならば、深淵もまた等しくおまえを見返すのだ」

哲学者      フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチエ

## プロローグ

——義術ぎじゆつにより脳以外を人工化した人類が当たり前となった時代。世界的な都市の大半が瓦礫と廃墟へ変わっても、そこから人々の営みが消えてなくなりはしなかった。

春の訪れを目前に控えた午後だった。

身体の芯を蝕むような二月の寒さが和らぎ、廃墟の都『東京』の荒野を見渡せる診療所の窓辺に穏やかな陽射しが降り注ぐ。室内ならシャツ一枚で十分な気温の日曜日である。

うつすら額へ汗を滲ませ、八倉直人やぐらなおとは抱えたダンボール箱を床へ下ろした。

手狭な廊下の右側に、四列も同じ箱を積み重ねた壁ができている。チラッと背後の診療室を振り返れば、大量の書籍や標本、カルテのファイルで作業台と棚は埋め尽くされていた。

「無理だな。この調子じゃ終わるわけがない……」

溜息をつき、小さく頭を振る。

久々の休日に、診察室を片付けようと思い立ったまでは良かった。

ところが、いざ片付け始めて気がついた。

これ、どう頑張っても今日中に終わる量じゃないぞ……。

八倉直人は「義術医」だ。肉体を機械化する『義術医療』の専門医を生業としている。

最悪、デスクと椅子、診察台があれば仕事はできる。ここを訪ねて来る患者は義術化した肉体の修復——すなわち「**施術**」が目的だ。故に、診察室の状態など気にも留めない。

とりあえず、カーテンで散らかった場所を隠せば暫くは乗り切れるだろう。

西暦二〇四三年現在、脳と脳幹以外の肉体を人工部品へ置き換え可能な『義術医療』あるいは単に『義術』と呼ぶサイボーグ医療が、世界中で広く普及していた。

人類は全身を義術化することで大半の病を克服し、生身ナチュラルボデーの肉体では考えられない、強靱な身体を獲得するに至った。だが、義術化処置は完全無欠な体をもたらず技術じゃない。

人工部品とて怪我をすれば壊れるし、メンテナンスを怠れば機能不全を起こす。

だからこそ、義術医療の専門医「**義術医**」が生まれた。

ただし、直人は医師免許のない闇医者だ。鬼才の女医に知識と技術を叩き込まれ、廃都の患者を何百人と診るうちに腕利きとなり、あちこちから依頼が舞い込むまでになった。

もともと、ここは女医の私室で診察室も兼ねていた。彼女の愛用したマグカップやチェスセット、医療関連の資料に人工部品の設計図、と元の主人を物語る忘れ物が多々あった。

彼女は間違いなく凄腕の義術医だ。それは、彼女の弟子として請け負ってもいい。

でも、生活能力は皆無で片付けのできない女性おとだった。おかげで、診療所を継いだ弟子は休日返上で、パンドラの箱じみた仕事部屋の掃除へ奔走するはめだ。

すでに事の開始から五時間弱——この辺りで小休止を挟むのも悪くない。

足下の箱を最前列に重ねておき、直人は室内中央を陣取るソファ―へ尻を埋める。凝った

肩をほぐし、センターテーブルへ放置されたハードカバーの洋書に手を伸ばした。

現代では珍しい紙の本であり、女医に頼んで譲ってもらった一冊だ。てつきり無くしたと思っていたが、彼女のデスクを整理していたら引き出しの奥底で発見した。

大方、彼女が読み返そうと持ち出し、読後に返し忘れて放り込んだのだろう。

やや細かな傷の目立つ本の題名は『闇の奥』だ。アフリカのコンゴを舞台に植民地主義の傲慢さと深い闇を描いたイギリスの作家・ジョゼフ・コンラッドの代表作である。

この本を読んでいると、六年前に東南アジアで経験した事件を思い出す。

戦争の狂気に呑み込まれ、最期は歴史の闇へと葬られた男の話だ。

すっかり日焼けしたページを捲り、作中へ意識を没入しかけたときだった。

「お兄ちゃん！ サーニャとあそぼっ！」

ひょこっと右肩の後ろから、金髪の少女が顔を見せた。

小さな体より少し大きめな黒いパーカーを着込み、セミロングヘアの上にすっぽりと猫耳フードを被っている。彼女はソファアの背もたれをよじ登り、直人の右隣へすんと下りた。

サファイアのような蒼い瞳を好奇心に輝かせ、英語の文面を横から覗き込む。

直人は冗談のつもりで誘った。

「一緒に読むか？」

「なんのご本？」

「昔の小説だよ。サーニャには難しいお話だな」

むう、と頬を膨らませ、サーニャは懸命に文字を追いつめた。

直人の自宅を兼ねる診療所には、彼女を含めて四人の少女が暮らしている。

四人とも歳の近さを除いたら、母国語から生まれ育った環境、性格や味の好みに至るまで共通点は欠片ほども見当たらない。ただ一つ、元軍人という点を外せばの話だが。

第四次世界大戦と呼ばれた戦争中、旧日本国防陸軍の兵士から「外人部隊」と揶揄された特殊部隊があった。第113特殊戦闘部隊。そこに、四人は終戦まで所属していた。

あの大戦が終結して約二年、彼女たちは終戦後に軍籍を捨て、元上官が企業した傭兵派遣会社『ブラックドッグズ』の社員となり、廃都・東京で銃を片手に日々を生きている。

サーニャは四人の中で最年少かつ、特殊な後遺症を抱える少女だ。

元の人格や記憶を“記憶洗淨処置”<sup>きおくせんじょうしよち</sup>で改竄され、彼女は戦闘や殺傷行為へ恐怖心や躊躇いを感じることはない、旧国防軍に都合の良い兵士へと仕立て上げられたのだ。

その代償として、サーニャは“成長”を奪われた。

本来は年齢の変化に合わせて訪れる“心身の成長”が抜け落ち、彼女は十四歳の現在でも精神年齢が六歳から進まない。現状で判っていることは、記憶洗淨処置が成長を止めた原因というだけで、これから改善できるか否かの見込みすら未だ立てられない状態だった。

三分ほど経過して、サーニャがプスプスと煙の出そうな頭で降参する。

「むー、サーニャ難しいのきらいっ！」

「……よしよし。よく頑張ったな」

彼女の頭を撫でつつ、直人は胸中で苦笑する。サーニャはロシア人だが、母国語以外にも英語と日本語を読み書きできるトライリンガルだ。だから英文を読むことはできる。

ただ、文章を読めたところでストーリーを理解できるとは限らない。

「とりあえず、翡翠に遊んでもらったかどうか？」

「エルヴィとお仕事いっちゃった」

「じゃ、レイヴンだな。きつと部屋かりビングにいるよ」

「サーニャお兄ちゃんとあそびたい」

「また今度な」

あと数ページも読んだら片付け再開だ。どうにか荷物の山を分別して箱詰めするだけなら夜までに終わるだろう。箱の中身の整理は、また時間がある時にゆっくりやればいい。

サーニャが唇を尖らせ、直人の右脇の間から強引に潜り込む。

「うおっ！ こ、こらっ、サーニャー！」

直人が動揺した拍子に本を落とす。一方、サーニャは膝上へ乗っかると、ツンとした表情でそっぽを向いた。彼女の頭に手をのせ、直人は渋い顔つきで長大息する。

「サーニャ」

「お兄ちゃんが悪いんだもん」

「あのなあ」

「やだ」

「しょうがないなあ……」

小さく肩を竦め、床上の本を拾い上げる。すると本の中ほどから、ひらりと葉書のような薄っぺらい紙が抜け落ち、サーニヤが空中でキャッチしたそれを何気なく裏返す。

直人が「あっ」と声を上げて驚いた。

それは、古びた写真だった。

黒髪の少女が小さな滝をバックに放棄された戦車へ座っている。翡翠石めいた水面が輝く川辺で、黒いビキニ姿の少女はちよつびり恥ずかしさを滲ませた微笑を湛えていた。

「ここにあったのか……」

この本と同様に無くしたと思っていたものだ。どこを探しても見つからなくて、ほとんど諦めかけていたが、まさか本に挟んで忘れていたとは思ひもしなかった。

本と写真には共通の思い出がある。だから写真を朶として使っていたのだろう。

直人へ写真を渡し、サーニヤは興味津々といった様子で尋ねる。

「お兄ちゃんのお友だち？」

「そうだよ。最高の親友」

「どんな人？」

「……情報工学の天才で凄腕のハッカーだったよ。あいつの手にかかれば暗号はパズルみたいなもんだったし、どんな強力なプロテクトも鼻歌交じりですり抜けてた」

「すごい？」

「ああ、かなりね。ただ、やたらと子供っぽい性格で負けず嫌いなんだよ。おまけに甘党でコーヒー嫌い。そのくせ、妙にお姉さんぶる癖があつてなあ。例えば――」

彼女の話を誰かにするのは随分と久しぶりだ。一緒に過ごした四年の月日は危険と波乱の連続だった。おかげで言葉として紡ぐたび、あの頃の記憶が脳裏で色鮮やかに蘇る。

サーニヤが話の合間で唐突な質問を寄越した。

「お兄ちゃん。その人のお家は？」

「えっ？」

「だって、お兄ちゃんのお友だちでしょ？ サーニヤも会いたい！」

「……………」

サーニヤの頭を優しく撫でて、直人は困ったように笑う。

「それは、ちよつと難しいな」

「会えないの？」

「……遠い場所にいるんだ。とつてもね」

もう彼女はこの世のどこにもいない。だから、どれだけ強く願っても再会は不可能だ。それでも一つだけ確信があつた。

「きつと、サーニヤも会ったら好きになるよ」

「お兄ちゃんは大好きだった？」

「最初はケンカばかりだったけどね。ただ、それは昔のはな――んごっ!」



突然、真後ろから首を絞められ、ごきゅつと嫌な音がした。直人が戦々恐々とした面持ちで顔を反らせば、褐色肌の少女が鋭い目つきでヘッドロックをかけている。

「……レイヴン……お前、いきなり……」

「その女……誰？」

レイヴンは東南アジア出身の少女で、サーニヤの保護者あるいは姉のような存在だ。艶やかな髪は乱雑に刈ったようなショートヘア、綺麗な褐色の肉体が無駄なく引き締まっている一方、女性らしい胸はセーターの上からでも目のやり場に困るほど豊満だった。

阿修羅も逃げ出しそうな凶相で、レイヴンが徐々に首を締め上げる。

「また、泥棒猫が増えた……」

「待て待て！ これは別にそういうわけじゃ！ んぐつ……」

「——浮気は許さない」

「違つ。そうじゃ、ない……」

意識が酸欠で遠のきかけたとき、彼女がようやく拘束を解いた。こちらが激しく咳き込むのを冷めた両目で見下ろし、レイヴンは右隣へ腰を下ろすと直人の鼻先まで顔を寄せた。

「ナオト。ちゃんと答えて」

わかったから少し待て、と喉元を摩りながら手振りで伝える。

彼女と出会い、こうして暮らすようになって二年が経つ。友人以上恋人未満という曖昧な関係を終わらせた二ヶ月前から、レイヴンとは恋人として付き合っていた。

彼女の両耳で輝くルビーのピアス。それは、直人が付き合い始めた日に贈ったものだ。

ネコ科の肉食獣を彷彿とさせるアーモンド型の両眼が、こちらじいーっと見つめて答えを待っている。だが、黒真珠のような瞳の奥で揺れているのは怒りでなく不安だ。

彼女の肩を抱き寄せ、直人は写真を手に嘆息する。

「これは昔の写真だよ」

ほら、と写真を裏返せば「二〇三七年、クアンシーの滝にて」と滑らかな筆記体で撮影日が書かれている。被写体の少女が、愛用の万年筆で自ら記した文字だ。

レイヴンが年数へ気づいて目を丸くさせた。

「もしかして、この女……」

「そう。沙希だよ」

雪島沙希<sup>ゆきしまさき</sup>。彼女は相棒であり、親友であり、理解者であり、八倉直人が初めて恋した女性<sup>ひと</sup>だった。なにより、復讐へ捧げた人生を変える切っ掛けをくれた存在だ。

彼女が命を賭して暴いた真実があるから、直人は「今」の生き方を選ぶことができた。

そういえば、と写真を眺めながら思い出した。

沙希の左隣に黒っぽい小型ドローンがいる。四角柱のケースにメカニカルな四脚とハンドアームの両腕を付けたそれは、沙希が「ワイズマン」と呼んでいた助手のドローンだ。

彼女の死後、機械の助手はどうなったのか？ その辺の記憶は曖昧でよく覚えていない。ともあれ、これで浮気の疑惑は晴れたことだろう。

「納得したか？」

しかし、直人の予想に反して、レイヴンは犯人の嘘を見抜くベテラン刑事めいた顔つきで写真を観察していた。沙希の水着を指さし、直人をジト目で軽く睨みつける。

「これは？」

「休暇で出かけたときに撮ったんだよ……」

「どうして水着？」

「泳げる水辺だったからな。それだけだ」

「……ずるい」

「は？」

直人の肩へ寄りかかり、レイヴンは拗ねた顔で言う。

「写真。私、撮ってもらったことない」

「そりゃまあ確かに……」

「水着も。私だって自信ある」

「お前は子供か！　ヘンなことで張り合うなよ……」

「別に。ちょっと悔しいだけ」

やれやれ、と両肩を竦め、レイヴンの髪を愛撫するように指で梳いた。

「この写真は特別なんだ。まあ、アイツとの思い出つてのもウソじゃない。いや、最後まで聞けって。これは、ある事件を忘れないための記録でもあるんだ」

「事件？　どんな？」

「それは……」

「教えて。ナオトの事なら私も知りたい」

「かなり長い話だぞ？」

レイヴンに無言で促され、直人が小さく唸った。

あの事件を語るには、第四次大戦中の記憶を振り返らなければならない。

戦中、直人は日本国防軍の軍人だった。第307特務機関所属の“特殊工作員”として、暗殺や破壊工作を中心とする表沙汰にできない非正規作戦へ何度も赴いた。

気づけば、サーニャがワクワクした顔で待っている。

「サーニャ。楽しい話じゃないぞ……」

「はやくはやくっ」

「しょうがないなあ……」

後ろ頭を搔き、直人は静かに口を開いた。

「――西暦二〇三七年八月、俺と沙希はミャンマーの国境地帯で任務へ就いてたんだ」

## 第一章 暗殺者の記憶

### 1

ミャンマーでは五月下旬から十月中旬にかけて雨季がおとずれる。

集中豪雨で河川が何度も氾濫を起こし、黄土色の泥水に寸断された道路や線路をあちこちで目にするものの、熱帯性モンスーン気候帯の国々ではよくある雨季の景色だった。

もともと、ミャンマーの国土は縦長なため、北部と中・南部で気候が違う。一年を通して高温多湿な中・南部が熱帯であるのに対し、北部の一部は寒暖差の少ない温帯だ。

シャン州の特別自治区「コーカン地区」も温帯の北部にあった。

深い茂みの奥で伏せながら、直人はデジタル式の単眼鏡を下げて舌打ちする。

「これだけ待って変化なしかな。中央諜報部の奴らガセを掴まされたんじゃないのか？」

蚊の鳴くような声で毒づき、乱雑に刈った短髪をぐしゃぐしゃと掻いた。

日本国防軍には、特殊工作員という独自の兵種がある。

特殊部隊兵士の能力と強靱さに加え、諜報員の知識や技術を合わせ持つ諜報と軍事工作のスペシャリスト。一般兵には「殺し屋<sup>キルワカイ</sup>」や「一人の軍隊<sup>ワンマンアームィ</sup>」と皮肉られる暗部である。

どんな危険地帯も一人ないし二人で潜入し、任務対象が人物や集団、建物であっても排除

を命じられたら速やかに殲滅する。女子供や元味方が敵だとしても躊躇わない。

第307特務機関の第一作戦班も同じだ。

直人は上層部から「暗殺者<sup>アサシン</sup>」のコードネームを与えられ、ここ一年半は東南アジア地域で暗殺や破壊工作へ従事してきた。どれも公にできない非正規戦なのは言うまでもない。

強化繊維で覆われた右手首へ触れると、自身のバイタル情報と現時刻が浮かぶ。

第三次大戦以来、兵士は「アーマースーツ」という戦闘用装甲服を着用する。防弾機能やパワーアシストを含め、スーツには戦闘や任務で役立つ様々な機能が備わっていた。

ちなみに、一般兵のスーツはオリブドラブを基本カラーとするが、特殊工作員のスーツは漆黒を基調とする。どちらもスーツの表面が環境に適した迷彩色へ変化する環境同化機能を装備しており、直人のスーツも今はデジタルパターンの暗緑色へ染まっていた。

かれこれ、七時間も湿った土の匂いを嗅いでいる。が、標的が現われる様子は未だない。

特殊工作員の任務では、この手の待ちぼうけに振り回される状況が多々ある。いくら情報を掻き集めても、こちらの立てたスケジュール通りに敵が動くとは限らないからだ。

現地時間は、午前七時三十七分。これから朝食にするのもいいだろう。

待機中の楽しみは専ら食事だ。甘い物を食べれば苛立ちも少しは紛れる。

直人が後ろ腰へ付けた多連結ポーチ——バンダリアを漁ってカロリーバーを抜き出すも、『チョコレート味』と記されたパッケージを見るなり眉根を顰めた。

冗談じゃない。嫌がらせにもほどがあるだろ……。

日本国防軍のカロリーバーで「一番まずい」と評判なのがチョコレート味だ。合成力カオマスの嘘くさい風味に加え、甘味料をケチったとしか思えないほど薄味で美味くない。

十中八九、後方支援担当の相棒が入れ替えている。彼女は甘党の子供舌だ。

たぶん、フルーツ味とイチゴ味は根こそぎ奪われた。賭けてもいい。

首元へ付けた骨伝導式の通信機を弄り、カロリーバー泥棒にコールする。

「ウィザードゼロ。応答しろ」

特殊工作員が単独で敵地を歩ける最大の理由は、情報分析官と呼ばれる支援要員が後方でバックアップを担っているおかげだ。情報分析官の仕事は多岐に渡るが、特殊工作員の作戦遂行中は、無人偵察機を含めた各種ドローンで広範囲の監視や分析を行っていた。

光学迷彩の効果で視認はできないが、こうしている現在も高度八千メートル前後で彼女の管理する無人偵察機が警戒飛行を繰り返し、約四十キロ圏内をカバーしている。

わずかな間において、雪島沙希の明るい声が返ってきた。

『こちら、ウィザードゼロ。どしたの？』

「話がある。回線を変えるぞ」

プライベート回線へ切り替え、直人が仏頂面で質した。

「……沙希。俺に何か言うことは？」

『ん？ んー……お疲れさま？』

「違う。また、俺の荷物から『特定の味』を抜いただろ」

『ごちそうさまでした』

「こいつぬけぬけと！」

『いいじゃん別にさあ。ナオは苦いの好きでしょ？ ブラックコーヒーとか』

「それとこれとは話が違う。だいたい、俺に嫌いなもんを押しつけるな。昨日の朝飯のときだってそうだろう。自分の皿から抜いたピーマンをこっそり盛り付けやがって……」

『え？ なに？ ノイズがひどくてよく聞こえませくん』

「てめえ……」

小学生ですら呆れそうな誤魔化し方だが、沙希は飛び抜けて優秀な分析官だ。気兼ねなく何でも話せる相棒であり、苦楽を分かち合う戦友としても信頼できる。

ただし、彼女の子供っぽい性格を除けばの話だが……。

『ねえ、食べないの？ 湿気ると余計にまづくなるらしいよ？』

大方、無人偵察機の送る映像を見て、ニマニマと意地の悪い笑みを湛えているのだろう。一年半も一緒に過ごしていれば、ノイズへ混じる微かな声の震えで想像がつく。

「……ったく、覚えてろよ。食べ物への恨みは恐ろしいんだからな」

『はいはい。ホント、ナオは子供だよね〜』

「お前にだけは言われたかねえよ……」

美味くないカロリーバーを齧り、直人は匍匐姿勢で待機を続行する。

人類が四度目となる世界大戦を始めたのは、今を遡って二年ほど前だ。



西暦二〇三五年十月一日、日本の人口密集都市へ中国と南北朝鮮統一国が無差別ミサイル攻撃を行った事件で、日本人口の約三分の一が何の前触れもなく死へと追いやられた。

後に『一〇一事変』と呼ばれる事件は、首都・東京を含む関東圏と西日本の主要な都市部や工業地帯の九割を壊滅させ、東北以西は灰燼と瓦礫の散在する廃墟となった。

もともと、日本と両国は領有権問題で小規模な軍事衝突を繰り返し、第三次世界大戦でも争った遺恨がある。そのうえ、移民政策や貿易問題を巡って複数の火種を抱えていた。

——極東の火薬庫。日本海周辺を第一次世界大戦の「バルカン半島」になぞらえて述べた社会学者の言葉である。結局、極東の火薬庫も歴史を繰り返すように爆発した。

日本臨時政府は、宮城県仙台市を暫定首都と定め、アメリカやNATO諸国の支援を受けながら、攻撃した両国へ報復を宣言。第三次大戦以来となる軍事攻撃へ動いた。

やがて、ロシアが中国、南北朝鮮統一国を支援し始めたことで、アメリカも牽制するべく本格的な派兵を行い、東アジアの戦火は開戦から二年で世界中へ飛び火した。

報復宣言後、日本はまず東南アジアへ目を付けた。

開戦当初、中国は圧倒的な軍事力を背景に東南アジア諸国を次々と蹂躪し、占領国の政権を解体。中国共産党指導部の息がかかった親中政権を樹立させていった。

国連で侵略行為を非難されると、中国政府の外相は何食わぬ顔で否定したという。

「東南アジアの人々は、中国共産党による指導を自ら進んで受け入れ、中国共産党と親密に協力し、中国と東アジア全体の革命、開発、改革事業へ共に力を尽くしているのである」

しかし、この発言がひとたび東南アジアへ知れ渡ると、暴動やテロが勃発した。

反中ゲリラやパルチザンが各地で組織され、人民解放軍へ対抗し始めたのである。

第三次大戦末期、日本は軍備拡張と侵攻を強める中国に対抗するため、東南アジア諸国、オーストラリアなどの近隣諸国と「東南アジア安全保障条約」を締結している。

この東南アジア安保を掲げ、日本は集団的自衛権を理由に軍を派兵した。現地の反中勢力との連携も功を奏し、ミャンマーやベトナム北部まで中国の占領地は縮小しつつある。

コーカン地区は、中国の雲南省と接する国境地帯であり、現在も中国の占領下へ置かれている。そのうえ、親中派の民兵組織が幅を利かせている物騒な場所だ。

沙希の退屈そうな声が鼓膜を震わせた。

『ぜんっぜん来ないね……』

『情報の精度は確かか？』

『たぶん。ミャンマー民族解放同盟軍の協力者から得た情報らしいから』

『……協力者ねえ。二重スパイじゃなけりやいいけどな』

今回の任務は、中国の工作員「黄宗儀」を始末することだ。

黄宗儀は、中央統一戦線工作部こと中央統戦部の次長として、各地の民兵組織と親中政権の間を取り持つ、外交官もどきのような役職へ就いている。

しかし、本来の貌は諜報活動を行うスパイであり、抗日系民兵組織を裏で支援しながら、日本国防軍の奪還した地域へテロリストを送り込んでいる工作担当官だ。

コーカン地区には“ミヤンマー民族民主同盟軍”という反政府組織が存在し、中国系移民のコーカン族を主体として、ミヤンマー政府と過去に何度も衝突してきた歴史がある。

中国は戦前から密かに彼らへ支援を行い、ミヤンマー占領後は大手を振って民兵の上層部を自治区のトップや要職に据え、周辺地域の統治まで組織へやらせるようになった。

ミヤンマー民族解放同盟軍と改名した現在は、三万人規模の構成員を抱える大所帯だ。そんな拡大の裏で暗躍しているのが、中央統戦部の黄宗儀である。

この男は残念ながら軍人じゃない。中央統戦部は中国共産党の政治的な外交と広報を担う政党の直轄組織であり、黄宗儀も表向きは一種の外交部へ所属する文民の官僚だ。

ジュネーブ条約や交戦規定の問題で、国防軍は文民を攻撃目標にできない。だからこそ、非正規作戦が専門の特務機関へ命令が下った。

——黄宗儀を対立民兵組織の仕業へ見せかけて抹殺せよ。

ミヤンマー民族解放同盟軍の対立組織はいくつかある。特に“ミヤンマー自由解放戦線”を呼称する組織は、二ヶ月で五度も衝突を起こしており最適な生贄だった。

ザックにゴミをしまい、直人はバレットM110狙撃銃のチークピースへ右頬を当てる。狙撃スコップの倍率は二〇倍、スコップレンズに標的を照準する十字線が入っている。

これをレティクルと呼び、上下左右に一定間隔で並んだ小さな点をミルドットという。

「おおむね風向きは九時方向で変わらず。風速は毎秒一五フィート前後か……」  
十二時方向から微風が吹いているものの、弾道への影響は小さなものだ。

直人は木々が生い茂る小高い丘へ陣取っており、狙撃スコープの向こうに見える未舗装の山道まで一六七〇メートルある。だが、有効射程二キロの対物ライフルなら問題はない。

ちなみに道幅は三メートルあるかどうかで、車がすれ違うのもやっとな狭さだ。

しかも、朽ちかけのスクラップが道の左右を飾っている。第三次大戦中に破壊された軍用車両が大半を占め、何年も風雨へ晒されて赤錆び塗れなオブジェと化していた。

おかげで道幅はさらに狭くなり、実際は一方通行の山道となっている。

ふうと両肩の力を抜いたとき、沙希がねだるように訊いた。

『ねえ、ナオ？ 休暇申請していい？』

『また唐突だな』

『だって思い出してよ。ここ三ヶ月でお休みあった？』

『小耳に挟んだ話じゃ大規模な作戦が近いらしい。諦めろ』

『ナオ。私は繊細でか弱い女の子なのだよ？』

『嘘つけ……』

『……ナオ？ 地雷原をピクニックして帰りたい？』

『たまには休むことも必要だなッ』

『わかればよろしい。じゃ、休暇申請出すね！』

『……どうぞお好きに。ま、オチは見えてるけどな』

『はい、そこ！ 悲観しない！ ちゃんと通るかもしれないでしょ？』

「……どうだか。っと、ようやくお出しました」

エンジン音が風に乗って西から聞こえてくる。

沙希が回線を戻して告げた。

『高機動戦車が二機、車両が五台。十分でエリアに入るよ』

「なに？ 車両だけじゃないのか？」

高機動戦車は、第三次大戦を象徴する自律兵器だ。人間の脳を模した人工知能を搭載する無人兵器の多脚戦車で、重火器を背負った鋼鉄の怪物と呼んでも過言じゃない。

ストックを右脇でしっかりと固定し、直人が照準点を睨む。

両肘を地面へつき、なるべく肩は水平に保つ。やや足を開いて、爪先は外へ向け、湿った土の感触を踵で感じる。伏射あるいは寝撃ちと呼ばれる命中精度を得やすい姿勢だ。

「対象車両は？」

『黒のランドクルーザー。軽装甲車で前後を挟まれてる』

「了解。そっちは情報通りだな」

日本には「中央諜報部」という情報機関がある。アメリカ中央情報局を手本に設立された中央諜報部は、日本国防軍が作戦を決める判断材料となる情報を集めている組織だ。

彼らの情報では、ミャンマー民族解放同盟軍に高機動戦車は存在しないとされていた。

ズン、ズンと腹の底へ響くような足音が、約一・七キロ向こうから伝わってくる。やがてゾウガメを彷彿とさせる四脚の巨影が、スコープレন্ズの内側へ映り込む。

暗緑色の敵機を観察し、直人は黄宗儀の暗殺を上層部が急いだ理由へ気がついた。

「あの野郎……人民解放軍のお古を民兵に売りつけたな」

29式高機動戦車「雷龍」と呼ばれる人民解放軍陸軍の機体だ。

歩行速度は六十キロとのろまな部類に入るものの、140ミリ滑空砲と20ミリ機関砲を複数備えている。挙句、多層構造の分厚い装甲は対戦車ロケット弾でも壊れにくい。

三世代前の型落ち品とはいえ、民兵の扱う武器にしては危険な代物だ。

黄宗儀はアレの引き渡して時間を取られたのだろう。銃器やアーマー、車両だけならまだしも、高機動戦車を供与しているとすれば無視できる限度を超えている。

二機の雷龍は車列の前後を固め、地響きを立てながら山道へ侵入し始めた。

十四、五人の民兵を荷台へ乗せたトラックと軽装甲車が続き、黒塗りのランドクルーザーが現れる。後部座席の窓へ照準を合わせれば、黒髪を撫で上げた眼鏡の男がいる。やや頬骨が張った面長で、神経質そうな印象を受ける痩せ顔——間違いない。黄宗儀だ。

「対象を確認した。あとは——」

突然、先頭の一機が道の中ほどで止まり、後続車もブレーキを踏む。薄汚れた白いバンが十メートル先で道を塞ぎ、高機動戦車のセンサーがそれに反応して止まったのだ。

バレットの棹桿を引いて初弾を薬室へ送る。

「……いいぞ。連中が止まった。散布は？」

『もうやってる。風向きもばっちり』

ここから南西六キロに小さな村がある。七時間前、直人が現地へ降下して最初に取っかった仕事は、その村から適当な車を拝借して、わざと山道で乗り捨てることだ。

民兵二人が爆発物や異常の有無を確かめて車列へ戻った。

あのバンは足止め用だ。爆発物やトラップなど探したところで出てこない。

標的の横顔から狙いを外し、進軍を再開した雷龍へ照準をつけた。ホームベースのような砲塔上に球体のセンサーアイがある。人工知能と直結している高機動戦車の弱点だ。

雷龍はバンを踏み潰そうと左の前脚を上げた。トリガーに指を添え、息を引き取るようにすつと呼吸を止める。鋼鉄の脚が車体を踏み壊す。風の微かな揺らぎを肌が捉えた。

レティクルの中心がピタリと重なり、直人が静かに引き金を絞る。

バレットの銃口が発射炎で染まり、12・7ミリ弾が轟音を残して飛び出した。

発射ガスが周りの赤土を撥ね散らかす。コンマ数秒で空気を切り裂き、五〇口径の弾薬が一六七〇メートルを疾走。弾丸が防弾層をあつさり穿ち、センサーアイを粉々に砕く。

敵襲へ気づいて、後続車両も停車した。

直後、砲塔が内側から爆裂し、装甲板が弾けて宙を舞う。拳句、弾薬庫へ引火したのか、一際大きな爆発を起こすと、機体上部は木端微塵に吹き飛んで鉄屑の雨を降らせた。

そして、オレンジ色の爆炎が大気へ触れたときだ。

軽装甲車、トラック、ランドクルーザー、と導火線を辿るように車両が次々と激しい爆発へ飲み込まれる。爆轟波を食らった車が横転し、道端のスクラップへ叩きつけられた。

業火を思わせる炎が山道を覆い、人間と残骸を区別なく燃やし尽くす。

ほとんどの乗員は即死だろう。もし無事だったとしても、防弾ガラスの破片で切り裂かれた全身はズタズタであり、車両の歪んだフレームから抜け出せず焼け死ぬに違いない。

時折、残骸の合間で炎へ巻かれた民兵がのたうち回っていた。

彼らの大半は全身を義術化した「義術強化兵」だ。生身の人間より肉体強度が優れているとしても、全身の三割を超える熱傷を負えば脳が激痛へ耐えられずショック死する。

恐らく、黄宗儀を含めて何が起きたかを理解できた者はいない。

例のバンを乗り捨てた後、直人は道端の残骸にミニボンベを設置して回った。遠隔操作の噴霧装置付きで、特殊な有機溶剤が五〇〇ミリリットルずつ各容器へ注入されていた。

それらは「ヴェルトロエン」と呼ばれ、義術医のいる病院で人工皮膚を接合する特殊樹脂を溶かすために使われている。無色透明なうえ、シンナーのような刺激臭もない。

しかし、ヴェルトロエンは揮発性と引火性が非常に高い危険物である。

本来の希釈して使う方法なら無問題だが、原液はケロシン系ジェット燃料と同等の燃焼性を持つており、引火時の爆発力はキロ単位のプロスタック爆薬へ相当するという。

ミニボンベの本数は計十二本、約六リットルしか容量はない。が、気化して拡散する面積と風向き、山道の道幅を利用すれば、一時的に密度の濃い空間を形成できる。

最後に、直人は徹甲<sup>H</sup>焼夷<sup>E</sup>弾<sup>I</sup>で仕上げを行った。

徹甲焼夷弾は、徹甲弾、榴弾、焼夷弾の三機能を備えた多目的弾頭を持つ弾薬だ。



タングステンの弾芯が貫通力を上げ、弾頭先端の焼夷剤がプラスチック爆薬を起爆させることで破壊力を増し、ジルコニウム粉の焼夷弾薬が高温で消えにくい火を起こす。

もつとも、たった一発で雷龍を破壊できたのは偶然だ。砲塔内部の弾薬庫が運良く誘爆を起こしたまぐれであり、結果それが連鎖爆発を誘発するトリガーとなった。

最後尾の雷龍を五発で沈黙させ、直人は炎上するランドクルーザーを視界へ収めた。

「対象車両の破壊を確認した。そっちはどうだ？」

無人偵察機以外にも、彼女は複数のドローンを管理している。

その一つが“インセクター”と呼ばれる虫型ドローンだ。蚊などの外見を模して作られ、窓の隙間やエアコンの吸気口から、走行中の車内へと侵入できる。

暗殺対象の声紋や脳波を回収できるため、こうした任務の際は欠かせない機材だった。

沙希が間髪を入れず答えた。

『脳波の停止は確認済み。大丈夫、間違いないよ』

「任務完了だ。撤収するぞ」

義術の普及した現代において、人間の生死は脳波の有無で判断される。脳と脳幹は義術化できない器官であり、義術化した肉体とは関係なく破壊すれば死をもたらす急所だ。

直人は茂みから立ち上がり、ザックとバレットを背負う。代わりに、地面へ寝かせていたM4自動小銃を掴み、スポーツサンングラスのようなウェアラブルデバイスを掛けた。

サイバーゴーグルという軍用機器で、弦にある電源を入れると、レンズへ距離計や照準点

が映る。サングラス型のヘッドアップディスプレイと言えばわかりやすいだろう。

「合流ポイントに変更は？」

『……特になし。データー送ったからそれ見てね……』

やけに浮かない声で返され、直人が思わず首を傾げた。

「なんだ。何かあったのか？」

『休暇申請の件……』

……却下されたか。ま、予想通りだな。

現在の情勢を踏まえれば仕方がないと思う半面、彼女の落胆する気持ちも理解できる。

ナビデーターを表示させ、苦笑しながら宥めた。

「そう落ち込むなよ。また申請すりやいいだろ」

『ううん。申請は通ったんだけど……』

「えッ。許可されたのかッ!？」

『次の任務が終わるまでダメだって。はぁ、つらい……』

「そういうことか。で、次は？ どこに行けばいいんだ？」

『よろづ屋本舗』

明暗異色のライトノベル販売サークル

近代 SF ハードアクションノベル外伝第2弾

# Black Dogs EXTRA 2

－ パニッシュメント・デイ －

著：黒ねこ作 イラスト：カロ

**C94 コミックマーケットで頒布予定！！**

既刊『Black Dogs』シリーズは&電子版でも販売中！！  
『よろづ屋本舗』のホームページ等で詳細はお確かめ下さい！

『よろづ屋本舗』



<http://yorodukatudousi.dou-jin.com>

本やサンプルの感想、ご意見等も歓迎です！  
ホームページや著者の Twitter 等に送っていただければ幸いです！

サークル代表：黒ねこ作 (@gretelproject)

# Black Dogs EXTRA 2

## － パニッシュメント・デイ －

発行者：よろづ屋本舗

HP：http://yorodukatudousi.dou-jin.com

Eメール：yoroduyahonpo@gmail.com

著者：黒ねこ作 (@gretelproject)

Twitter：https://twitter.com/gretelproject

イラスト：カロ (@karoro3rd) pixivID: (1665877)

装丁デザイン：船木渡 (船木同人ワークス)

編集：黒ねこ作 (@gretelproject)

これはサンプルです。完全版ではありません。

本書の著作権は著者にあり、著者に無断で本書の内容の一部または全部を無断で複写(コピー)することを禁止します。

また、この作品はフィクションであり、実在する個人、団体とは一切関係ありません。